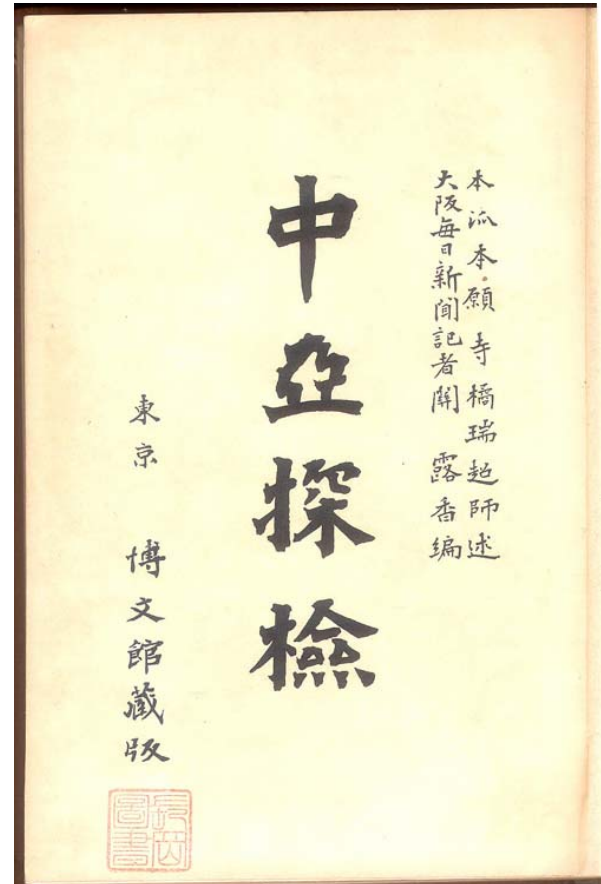
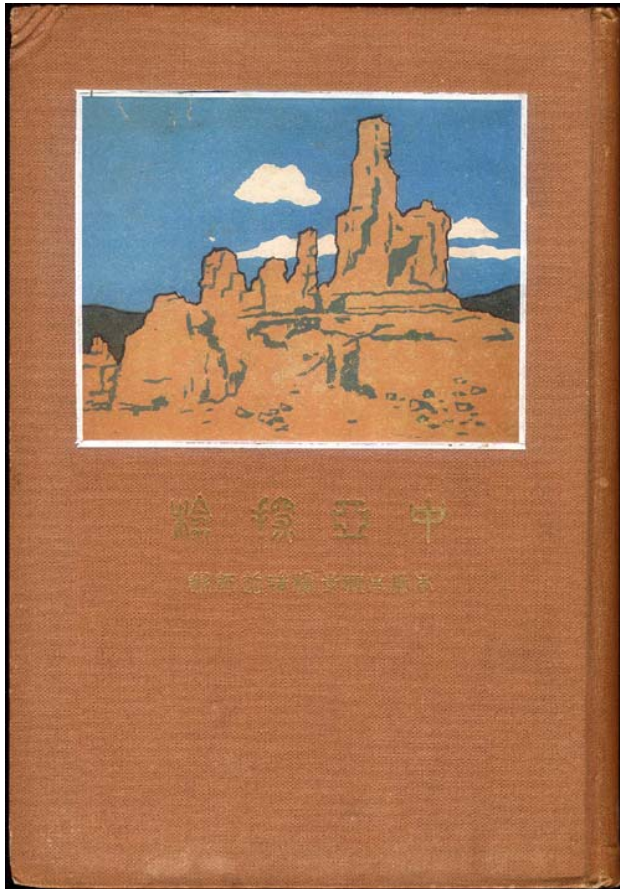


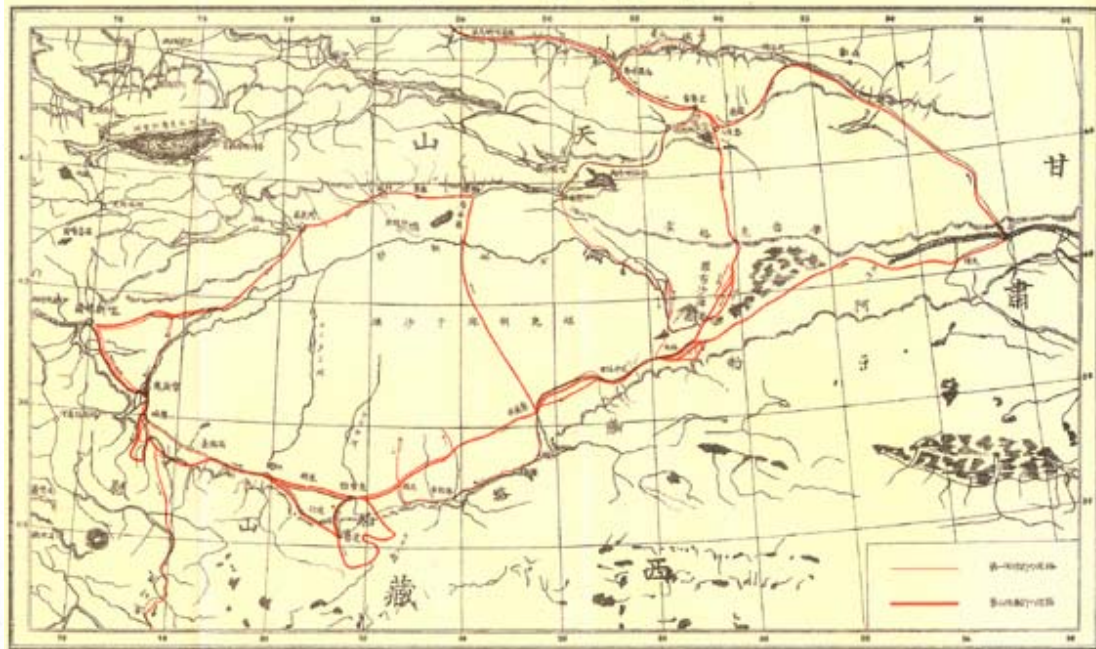
『中亞探險』 橋 瑞超 (大正元年)
— マカートニ— 関連部分の抄 —





師超瑞橘の前發出教倫

師超瑞橘
圖行旅檢探亞中



ります。

二十八 嗚呼 ホ ッ プ ス

此の一寒村から天山南路の大道に出づる間に於て、私は新舊幾多の河流又は涸渴した河床を見た、之を踏査すれば地學上頗る興味あり、且有益なことであつたでせうが、私は一刻も早く庫車に行かねばならぬ身で残念ながら此所を素通りした、私は土民中嘗て庫車に往復したこののある者を道案内として雇ひ、今まで引率して来た土耳其人等は悉く此の村に残し、村民から一頭の馬を借受け、之に鞭ち晝夜兼行庫車指して急ぎました。

斯て私が天山南麓の布告爾といふ一都會に達したのは拂曉であつたに覺えて居ますが、雪の衣を被る天山の朝風は、身に徹へて凜々

肌を劈かん許り、シカモ眼前の雪峰は拭へる空の旭日に映じて其の美觀譬ふるに物なく、三ヶ月以前吐魯番にて此の雄大な天山の雪景に接してから、今日再び此の英姿を仰ぐ私の快感は忘れんとして忘れ難きものであつた、ソレより私は再び馬を西に向け、夜を日に繼いで庫車に急ぎました。

漸くにして私は薄暮庫車に到着した、四邊は朦朧とし、燈火は薄ボシヤリとして、此所彼所の窓にホノ見えて居る、勿論油は羊の脂肪であるが、兎に角庫車は此附近での都會で、洋燈を點けて居る家も少なくない、街上は土人の往來で頗る雜沓して居りますが、其不潔いつたら殆んど御話にならない、併しながら雲と沙の外無一物の沙漠から出で、來た私に取りましては、如何にも之が都會で、其夜景も決して單調でない、何は兎もあれ、私は三ヶ月以前に吐魯番で別れた

ホツブスを探し當てなければなりません、私は彼の居る所は、此所か彼所か、と捜し廻つた處が、ドウやら私の尋ねる人は最早此世に居らぬといふやうな話を耳にしました、シカシ私は何うしても之を信ずることが出来ません、恐らく彼等土人の死むだといふ外國人は、ホツブスではなく多分別の人であらう、と思つて尙所々方々を聞き合せて見た所、矢張り死むだといふのはホツブスらしい、私も遂に之を否定する勇氣もなくなつて、愈ホツブスは死むだに相違ない、嗚呼可哀さうなことをした、渠は本國の倫敦に老いたる親もあり、兄弟もある、然るに渠は此處に天涯の一孤客となつて殊に唯一の頼みとする私にも會はず、僅か十七か八の未だ蓄の若き身を以て、獨り淋しく他界の人となつたのであるかと思へば、如何に無頼着な私でも焉んぞ斷腸の思ひなくして居られませう、ホツブスの死は最早一點の疑念

を挟む餘地がない、是に於てか私の身體は、火の付いたやうに忙しくなつた、私はホツブスの死去に就て第一に支那の官憲や喀什噶爾駐在の英國總領事や、乃至北京駐在の我日本官憲など、種々交渉するの必要が出来ました、尙又各方面の關係者にも打電するの必要があります、其上ホツブスに托してあつた私の大行李の整理をもしなければなりません、尙前の一寒村に残して置いた一隊にも、夫々命令を發せなければなりません、此の短時日に於て私は出来得る限り早く用事を片付けて、今は喀什噶爾の英國總領事館に運ばれつゝある、ホツブスの遺骸の始末をもせねばなりません、それで私は沙漠を出でて尙多少衰弱した體をも顧みるの暇もなしに、又もや庫車を出で、喀什噶爾に急行したのであります。

二十九 又も悲しき故國の音信

庫車から喀什噶爾に到る道路は所謂天山南路の大道で、人馬の往復は頗る頻繁であります。沿道は概して沙磧帯で、其の間に幾多の河流交叉し、或は楊柳灌木類の繁茂した所もあれば、或は沙塊相交錯して突起した所もあり、又河流横溢して脛を浚はんごする所もあれば、或は飲料水不良にして苦鹹飲むに堪へざる所もあり、去ながら旅人が宿舎に窮するやうな事は殆んど無いといつてもよろしい、殊に此間には拜城、阿克蘇、或は瑪喇巴什、いかいふ、人口が二三萬もあつて、歴史、上若くは佛教、東漸史の研究上、極めて必要な都會もあります。私が私に専ら喀什噶爾へ急いだ爲め、此處に滞在する暇もなく、唯力の及ばん限り、根の續かん限り、晝といはず、夜といはず、馬

に鞭ちて非常に急いだ。シカシ此邊の馬は謂所駄馬で、如何に鞭ちても一向に利目がない。其上一の村落に到着して馬を取換へるにしても、或時には無益に數時間を費やさなければならず、氣は焦る。馬の用意が出来ぬといふやうな譯で、非常な困難を致しましたが、ソレでも十五六日目に喀什噶爾に到着した。依つて直に英國總領事館を訪ひ、ホツプスの遺骸を受取り、英國總領事マカトニー氏立會の上で、ホツプスの葬儀を営むことになりました。會葬者は英露兩國總領事と二三の外國人で、茲に私は忠僕の遺骸と永遠の別を告げねばならぬことになりました。時に明治四十四年三月二十一日午後六時三十分。私は第一回の探檢旅行に喀什噶爾へ来た時、土耳其人の一富豪の別荘に一ヶ月許りも滞在して、其年の夏を送り、紀念として其庭に梨の樹を植えて置きましたが、今度再び此所に來まして、其樹は如何な

つたかき尋ねて見れば全く枯れて了つて跡方もありませんでした、ソレで今度も亦二十日餘り其家に滞在しましたが、ホツプスの葬式を済まして間もなく日本から電報が届きました丁度此時は夜で私は獨り燈火の下で茫然として居ります、ボーイが電報を私に渡した、何事かと胸を轟かしながら披いて見ます、是は又如何にお裏様が御逝去遊ばしたさいふ御知らせなのです、時もありうに所もあらうに斯る悲報に接せんとは夢にも思はなかつた、一從僕ホツプスを喪ふて其面影のまだ私の眼の前にチラついて居る、矢先き今は又大恩人の御裏様が御他界遊ばされたとは何うしても私は信ずること出来ませんでした、幾度も電報を讀返し我々我心で文字の解釋を求めて見ましたが、事實は矢張り事實で如何に私の慾目を以て之を打消さうとしても駄目、私は遂に魂の抜けた人のやうに薄暗い

燈火の下で電報を眺めて居ります、私が倫敦で御別れ申した時の御姿が有り、この眼の前に描かれて來る、思うて見れば植ゑて置いた樹は枯れる、ホツプスは死ぬ續いて御裏様御他界の報が來る、誠に不吉の事ばかりで、私は唯一人薄暗い一室で慰めらるゝ友もなく、茫然として爲す所を知らなかつた、其の當時のこころを今想ひ起しても洵に言ふに言はれない感が起るのであります。

三十 喀什噶爾の今昔

喀什噶爾は支那中央亞細亞における最大なる都會の、一で人口約六萬もあり、政治上商業上頗る重要な所で、露領土耳機斯坦より喀喇鐵列克達坂の峻嶺を越えて支那領土耳機斯坦に入る關門である、語を換ていへば古來東西文明の接觸地で、歷史上及び國際政治上誰で

も研究を要する所であると思ひます勿論支那領でありますから支那官憲の各衙門もあり又英領印度に接近して居るから英國の總領事館もあります露領土耳其斯坦に接して居るから露國の總領事館もあります英國總領事は久しく此處に駐在して中亞の事情に精通し且考古學者として有名なマカトニー氏でありますが露國總領事はペテロヴオスキー氏去つて今はドストロスキー氏といふ敏腕家が駐在して居ります斯の如く英露及び支那の官憲が駐在して互に睨み合つて政治上軍略上最も大切な所でありましたが昔時にあつては幾何の血が此所で流されたか知れない位置は北京を距ること日本里數で約二千里の西北隅で葱嶺から流れて居るキジルス(土語の赤い水といふ義)といふ河の邊りに在りますが漢時代の疏勒といふ國はドウも今日の喀什噶爾附近にあつたのだらうと思ひます又玄

莽三藏の大唐西域記にある劫沙と云ふ國も此邊で無ければならぬ。此喀什噶爾では私と同様の目的を以て幾多の外國人が發掘を試みましたが古來の大都會で人口も非常に多かつたに拘らず發掘物絶無といふに至つては私も十分に其理由が分りませぬ併しながら漢時代から今日に至るまで一度も此都會の廢滅したといふことはないので常に大都會としての形態を持續しつゝある以上殊に中古より近世に至る迄夫の阿剌比亞に興つた回々教徒が漸次其勢力を得るに従ひ此中央亞細亞に蟠踞せる佛教を破壊すべく幾度か西方亞刺比亞より鐵列克達坂の峻嶺を越えて此喀什噶爾に攻入つたのでありますから古代佛教の遺蹟が是非共此附近になければならぬのであります但從來幾多の探検家が此附近の古城址や古寺を發掘しても之といふ發掘物を獲ないといふのは頗る不思議で尙充分

に研究すべき餘地があるを私に信じて疑はないのであります、即ち大局より觀て中央亞細亞自身が正確な歴史を有たないから此間に興亡した國々の沿革は素より之を明かにすることが出来ないが、唯此喀什噶爾は昔から今日まで存続した一大都會であるから必ずや之を證明するだけの何か發掘物を發見すべき筈であります、私の所謂研究の餘地ありといふのは即ち之をいふのであります。

三十一 異人種の展覽會

喀什噶爾に蝟集する人種の數は非常に澤山で宛然種族の市場であるかの如き觀がある先づ國籍からいへば支那人も居る又露國人も居るのですが、一概に露西亞人といつても其中にはアンジアン人あり、サマルカンド人あり、ダシケント人あり、純粹の露國人も居るこ

いふ姿で、其他支那人でも英國人でも均しく其通りで各方面幾多の人種が此處に集合して種族の展覽會を開いて居る、茲には又回漢の二城があつて兩者相距ること二里、此に劃然たる區別を立て、居りますが、又回漢互に雜居せる所も決して少くない、即ち回城の戸數は約七千もあるに反して漢城は僅に其六分の一に過ぎない、尙支那官憲の各衙門及び郵便電信局通商局銀元局等も回城内にあり、城門外には英露兩國の總領事館並に露清銀行支店露國郵便局等もあつて、城の内外共に繁華を極めて居ります、又城の東北一里餘を距る老樹翁鬱たる森林中には回教徒のメシッドといふ宏壯な一寺院あり、此處は吐魯番に亞での靈場として同宗徒の順禮が年中絶ゆることのない程賑ふて居る、物産は鐵器其他の細工物で羊毛獸皮等は中亞の各地方から一旦此に集まつて又各方面に輸出分配されて居る。

斯の如く、此處は中亞に於ける政治上商業上の中心點でありますから今日まで中央亞細亞に旅行したもので喀什噶爾を紹介しない人は殆んど一人もない、サレば喀什噶爾の名は遠き昔から既に普く世人に知られて居るので、現に今を去る十年前我法主猊下には英國より歸朝の途次波邊堀本多其他四五人を召連れられ、露領土耳機斯坦より鐵列克達坂の峻嶺を越えて、此の喀什噶爾に來られ、數日間滞在の上、葉噶羌を経て印度に出でられ、波邊哲心堀賢雄諸氏は猊下と御別れして新疆に止まり、多少の調査をして歸朝したことでありますから、本派本願寺と中亞との關係は、強ち今日私に依て始まつたといふ譯ではありません、即ち十年前以前に法主猊下が親しく此の附近を踏査せられたので、私は單に猊下の御命令と御指圖に従つて、前後五年間此附近を歩いたといふに過ぎないのであります。

既に前にも申した如く、私は此の附近の古城址を所々發掘して見ましたが、少許の古錢か硝子器の破片位のものしか發掘しなかつたのです、尙、昨今新聞紙の報ずる處によると、支那革命の餘波は此邊にまで及び、何となく騒々しいやうですが、私は既に申した通り、喀什噶爾は中亞に於ける政治上及び商業上の中心であり、且英露及び支那の領土が三方面から互に接觸して居る地點でありますから、日本に取つても喀什噶爾の未來は頗る興味ある問題であるやうに思はれます。

三十二 多趣味の山嶽跋涉

喀什噶爾の用事も既に片附いたから、私は先に塔里木の一寒村に残して置いた、沙漠横斷部隊に向ひ、庫車にある大行李を收容し、天山